

# 博士学位論文審査要旨

2011年7月23日

論文題目： 〈場所の力〉による創発イノベーションに関する研究  
ーウエルネス概念に基づいた社会実験を通してー

学位申請者： 西村 和代

審査委員：

主査：	総合政策科学研究科	教授	今里 滋
副査：	総合政策科学研究科	教授	新川 達郎
副査：	立命館大学共通教育推進機構	准教授	山口 洋典

要 旨：

西村氏は、本論文において、社会実験を通じてソーシャル・イノベーションを創発する〈場所の力〉の必要性和有効性を、ウエルネス概念を共通の規範的基軸としつつ、実証しようとする。

まず、第1章では、現代社会が、一見、物質的豊かさにあふれていながら、その実、様々な面で深刻な問題を抱えており、そのような問題の解決主体として市民社会を足場とする社会企業家が注目されていることを指摘する。そして、自らが女性であることを踏まえ、〈いのち〉を産み育む女性たちこそが、人間の生存さえ脅かしかねない近代文明のもたらす災厄に立ち向かうべきことを主張し、また自らのミッションとして措定する。

第2章では、「〈場所の力〉による創発イノベーション」概念形成に至る理論的作業の経緯が述べられる。「場」に注目する伊丹敬之や岩崎正弥らの所論を援用しつつ、単なる三次元空間ではない、時間軸（＝継続的営為）と意志軸（＝変革への意欲）を加えた、いわば五次元的空間において、人びとが集まりコミュニケーションとアクションを繰り返す（＝創発）中からイノベーションが生起するという独自の概念装置を構築するに至っている。

第3章から第5章は、社会実験のエスノグラフィである。第3章は、大原の同志社農場と農家キャンパス農縁館において5年間にわたって、小学校低学年の児童・保護者を対象に行われた「食育ファーム in 大原」の記録である。開墾、耕作、収穫、調理、接遇といった「畑からお皿まで」の、全国的にも類を見ない食育実践を通じて、児童や保護者の価値観や行動が「いのちの大切さ」を起点に変容していく創発イノベーションの様を豊富な資料や画像を用いて説得的に叙述している。第4章は、フィールドワーク「遊びの達人教室」である。ここでも、農縁館、町家キャンパス江湖館、後述する「さいりん館」という「場所」で子どもが大学院生らとコミュニケーションとアクションを繰り返すことで、社会性を身につけ、問題意識を開化させる様が活写されている。そして、第5章は、筆者が他の大学院生と共同経営する形で開設した「さいりん館室町二条」でのソーシャル・ビジネスの展開とそこにおける創発イノベーションの事例が論じられている。町家という京都独特の空間が公共的意志によって規律されるとき、イノベティブな営為が自生することを、〈場所の力〉による創発イノベーションの具体的メカニズムとして、分析している。

以上のような社会実験に基づき、第6章と第7章においては、イノベーションを創発していく上で一定の要件を満たす〈場所〉が有効かつ必要であることを、多角的な視点から論じている。

本論は、概念装置の構築過程にやや強引さが見られるものの、それは、類例を見ない独創的な社会実験で実証される〈場所の力〉という革新的な嚮導概念のオリジナリティを損なうものではまったくない。よって本論文は、博士（ソーシャル・イノベーション）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2011年7月23日

論文題目： 〈場所の力〉による創発イノベーションに関する研究  
ーウェルネス概念に基づいた社会実験を通してー

学位申請者： 西村 和代

審査委員：

主査：	総合政策科学研究科	教授	今里 滋
副査：	総合政策科学研究科	教授	新川 達郎
副査：	立命館大学共通教育推進機構	准教授	山口 洋典

要 旨：

西村氏の学位申請論文について、2011年7月23日午前10時30分から午前11時30分まで、公聴会方式により口頭試問を実施した。まず、西村氏自身が約30分間論文の概要についてのプレゼンテーションを行い、その後約30分間、西村氏と審査委員との間で質疑応答を行った。

審査委員からは、社会実験相互間の関連性や概念装置の論理的一貫性等について確認や質問があったが、西村氏はいずれに対しても理路整然と的確に回答を行った。

以上のことから、西村氏の十分な研究能力を確認することができた。

また、外国語能力については、先行研究、関連研究の英語文献を広範囲に渉猟し咀嚼・消化しており、その理解、引用、参照においても誤りがないことを確認した。したがって、研究に必要な外国語能力は十分であると判断した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目： <場所の力>による創発イノベーションに関する研究  
－ ウエルネス概念に基づいた社会実験を通して －  
氏 名： 西村 和代

## 要 旨：

本論文は、京都市内の都市部および農村部において行った社会実験をフィールドに取り組み、協働的实践を元にソーシャル・イノベーションへの潜勢力を持つ理論モデルを提示しようとしたものである。社会や地域における現代の問題には、生きづらさやつながりの希薄さが挙げられ、解決に向けて多くの課題が設定されている。そうした課題に取り組み、社会を変革していくにはどのような思想を持ち、何に着手していく必要があるのか。その具体的方策を検討するための社会実験を構想し、実社会において適用させた。そこから人が<よりよく生きる (Well-being)>を実現するために必要となる要素や、どのようにイノベティブな発想や行動が創発するのかについて、その様態を社会実験的に検証して論じた点に本論文の特色がある。

したがって、本論文の目的は、ウエルネス概念に基づいた各種のフィールドワークから、<場所の力>によって起こる創発イノベーションについて欠かせない条件や要素に検討を加え、創発イノベーションがソーシャル・イノベーションへの道程となり得ることを実証するであるとも言える。これまでのソーシャル・イノベーションに関する先行研究を管見した限りでは、実践者自身の経験を踏まえて論じた研究やソーシャル・イノベーションの創出プロセスに関わる知見が少ないと指摘できるように思われる。さらに、社会実験を構想する際に導入したウエルネス概念自体も、「社会」との関係性を射程に入れてその概念を追究した研究が十分ではなく、また研究動向として「社会」のウエルネスに焦点を当てた研究が求められることから、本論で同概念を軸にした実践研究に取り組む十分な意義があると考えられる。

また「私の置かれている現実と必然性」に立脚した3つの社会実験、すなわち 食育コミュニティの創出、子どもの居場所づくり、および 私設公共空間の創造を、それぞれ実践的研究としての社会実験として位置づけ、それぞれの成果に対する分析を行い、<場所の力>の要素、効用がどのような関係にあるのか、またどのような影響があったのかを明らかにした。本論文の主題とした<場所の力>によって創発されるイノベーションは、分野横断的に起こり、取り上げた3つのフィールドワークも、それぞれが相互補完的に作用している。そのことを踏まえて、<場所の力>によって創発イノベーションを生起しうるモデルを提示できたのが本論文の独創的な成果である。

さらに、各フィールドワークを分析する視座として活動理論を採り入れたことも本論文の特徴である。活動理論によって、人間の多様な活動を分析し、かつ新たにデザインしていく理論的枠組みが得られた。これらの知見やフィールドワークを通じて得た経験知をもって「自己」を捉えなおし、<よりよく生きる (Well-being)>についての議論を構築し、結論を導いた。

論文は7章で構成されている。第1章では、社会において表出する諸問題に立ち向かうべきセクターは、行政だけではないことを指摘し、多様なアクターの発想から社会が変革していくことに焦点をあてイノベーターの台頭を取り上げた。その際、<いのち>を産む性としての女性の視点が重要であることを確認し、問題を発見した場合に「ほっとけない」女性性から実践の糸口を紡ぎはじめる。自分にできることから現状を変えていきたいと活動を始める女性たちの行動変容は、フィールドワークを記述する第3章から第5章で記述した。このような具体的な動きの一方で現代社会に広がる閉塞感や経済格差は、物質的なものから心理的なものへと複雑化してきた。

その解決にあたっては人間の生き方が問われている。社会のゆがみをあぶり出すような不祥事、不正の横行、社会的公正を欠くような偏見や差別は「構造的暴力」といえ、その解決に向けては、やはり一人ひとりの身近に迫る問題として捉えられなければならないこと、市民社会における革新的な取り組みとその担い手の登場が期待されていること、現実的状况と不可分であることを改めて指摘した。そして本論文に頻出する「場所の力」、「創発」、「イノベーション」の用語を整理し、実践研究へのアプローチを示した。

第2章では、「<場所の力>による創発イノベーション」—概念形成に至る理論的道程と題し、本論文の骨格となる理論群を本論文の主張となる人が「いかに生きるのか」と照らし合わせながら「よりよく生きる（Well-being）」ための理論を実社会において実践する人々（＝ソーシャル・イノベーター）の存在が、社会を革新（＝ソーシャル・イノベーション）していくことにつながった。「場」という考え方は、自然科学・社会科学・人間科学を問わず用いられている。なかでも、社会科学分野の社会システムを中心とする環境の中で、組織や人材をマネジメントすることに場の視点を持ち込み、新たな要素を見出している伊丹敬之や、「場の教育」を提唱している岩崎正弥の論考から、<場所の力>について検討した。そこから、何気ない、見落とされている locus（場所）に focus（焦点）した状態が<場所の力>を生み出すと考えた。また、「創発イノベーション」という用語は、社会実験的手法を用いて場の創造を行ってきた筆者が、イノベーションが起こる様態を捉えた造語である。フィールドワークの経験知から生み出され、経験知を重ね合わせていくことで起こる新しい価値の創造が「創発イノベーション」であるとした。人が人に、人がものに、人が場所に相互触発され、新しい事態の発生やその進化と深化から、社会を変革するイノベーションに至るのではないかと問いを立てた。続いて、イノベーションの視点に焦点をあてた。そもそも、<いのち>と食を巡る議論の展開が本論文の骨格になっている。食に関する研究は多岐にわたっており、学際的な研究も多い。先行する研究のなかでも、環境教育分野における食農教育を取り上げ、「食べもの」が私たちの口に入るまでの段階が時代とともに変化してきたことを分析して整理を行い、第3章で記述したフィールドワークへの視座とした。様々な時代における食環境の歴史的変遷、望ましい食環境のあり方などから、子どもたちに「食環境」について学習する機会をもっと多く与える必要があるとした。さらに、「いかに生きるか」の問いに対して<いのち>の概念を措定すべく、3つの観点から接近した。<いのち>は、個の生命体の存在を可能にさせる、時間的、関係的要素への着目が要請される。すなわち、<いのち>とは、他の生命体や環境、さらには祖先と遺伝子を介してつながった、より包括的な概念なのである。このように措定した<いのち>の概念は、ウェルネス概念やサブシステムという理論的側面に照射することとも直結していった。自律自給による暮らしの再編が「食の主権」回復へとつながっていく様子を運動面でとらえ、食育実践への手がかりとした。そして、エコフェミニズムが示す「豊かさ」と場所の関係をジョン・アーリの論考を軸に分析の視角とした。アーリのいう時間-空間と、ジェンダーやエスニシティの社会諸関係とのつながりに関して、フェミニズムのパースペクティブから発展してきた議論が重要であり、男女の有給労働と無休労働の空間的分布は相当異なっているが、多くの社会科学は不当にも男性の有給労働にばかり焦点を当ててきた点は、資本主義社会でのゆがんだサブシステム生産・労働と場所を社会的構成から迫ることにした。本章の最後に、フィールドワークへ向けた理論的枠組みを提示した。ウェルネス概念は、本論文の価値観を決定づけるものである。また、生活や消費、労働といった分野には、クリエイティブ資本論を用いた接近を試みる。個人のライフスタイルの変容にとどまらず、社会を変えていくことができるのか、表出する課題と共に示した。フィールドワークを分析する枠組みとしてふさわしいとした活動理論は、拡張的学習の理論を道具としながら、仕事や組織の実践の中で、人々が現状の矛盾に出会いながら、対象との継続的な対話を進め、活動の新たなツールやモデル、コンセプトやヴィジョンを協働で生みだすことによって、制度的な境界を越えた自らの生活世界や未来を創造していくという分析の視座を提供することとなった。

第3章から第5章は筆者の行ったフィールドワークを記述した。各事例はエスノグラフィーをまとめ、第6章での活動理論での分析につなげた。各事例で抽出された矛盾からの脱構築的創造を通じてイノベーションしてきた部分に着目し、生みだした<場所の力>に関して条件を明らかにしていった。

第3章では「食育ファーム in 大原」の5年間の活動から、食育コミュニティの創造について、特に参加者の立場や役割が変わる点に焦点をあてた。客体的であった参加形態から、主体的な参画へのプロセスには、イノベティブな要素が多様に含まれていた。自分たちで企画を実現させていく母親たちのネットワーク力と遂行能力に、想定していない事象が表出することになり、「食育ファーム」の進化を記述していった。大原という都市近郊農村の<場所の力>が、多くの参加者を惹き付け、「また行きたい」と思わせる活動へとつながっていった。「食育ファーム」は、小学校と大学院との連携のなかで行われてきたプロジェクトであった。その継続へのダブルバインドな状況から、活動を引き継ぐ研究者の登場を脱構築的創造と捉え、食育コミュニティの地域への展開を第5章で取り上げた「さいりん館」での活動の中で記述した。

第4章では「あそびの達人教室」を取り上げた。7年間の活動では、場所を移動しながら開催してきた。その経緯からは、偶然や必然を繰り返しながら<場所の力>を得て活動が深化していったことを述べた。結果的には、4箇所で開催されており、第3章で記述した大原、第5章で記述した「さいりん館」が活動の場所となっている。それぞれの会場は、それぞれの特徴を有し、<場所の力>を考察する絶好の事例となった。会場の変更に伴って、活動を担う主体が変わっていったことも考察の対象とした。そこには、地域と大学との関係や、子どもの居場所の意義もあわせて検討している。「さいりん館」で行った「あそびの達人教室」からは、今後地域で展開していく居場所づくりのあり方を浮き彫りにできた。

第5章では「京町家 さいりん館 室町二条」を取り上げた。この活動の着想を得たきっかけから、コンテンツの発想、運営をしていくその方法などを詳細に記述していくことで、実践者の視点での分析が可能となった。具体的には、地域に「よそ者」として入り、溶け込んでいくまでの取り組みを、その仕掛け方や仕組み方から失敗も含んで述べ、ローカルな普遍的モデルとして提示していった。その展開のなかで、食育コミュニティは深化し、地域でのネットワーキングがなされていった。

第6章では、前述したフィールドワークから得た実践知、経験知から、<場所の力>が創発を促している点を活動理論によって分析し、考察した。食育ファームは、自立・自給・連帯というキーワードを挙げ、さいりん館に接続する。あそびの達人教室は、地域のお作法や地域での「場の教育」の必要性和その可能性が浮かび上がり、さいりん館で開催されてからの「場の教育」実現への検証を行った。さいりん館は、全てのインフラストラクチャとして機能していた。私設の公共空間という独自の運営形態を編み出し、地域への貢献も含めて、<場所の力>の活用を示した。そこでは、「自己」を見つめる機会が生まれ、自己実現やアイデンティティを「労働」の観点で議論した。さいりん館ではインフラストラクチャとしての機能していたことは、各事例が示すところであるが、汎用的かという、そうは言い切れないという結論に達した。それは、さいりん館が「意志のある場所」として理解され、活用されてきたことから、適度な規範を有していることによる。さまざまな創発の様態をみることができたが、準汎用的な部分にこそ、さいりん館の特性がみられた。各事例では、見落とされたような日常性を丁寧にすくい取り、ネットワークというつながりを創発させ、そこで生まれてくる行動変容は、小さな変化でしかなかった。しかし、その特性を生み出す条件や、日常的な暮らしから新しい要素を見出していくことは、身近な地域での活動モデルとなっていくであろう。

以上のような結果から、第7章では本論文の結論として、「創発イノベーションモデル」を示した。イノベーションの創出プロセスとして以下の4点が示された。1点目は、<場所の力>はもとも存在する場が持つものであるが、その場を発見し活用することが、イノベーションにつな

がるということである。2点目は、イノベーションの源泉には<場所の力>が作用しているということである。3点目は、そうした<場所の力>によっておこるイノベーションは「創発」を誘発しているということである。そして、4点目は、イノベーションが起こる循環は、実践者たちの多様な感覚によって理解され、触発されているということである。

このように、本論文は、ソーシャル・イノベーションへの道程を示すため、創出プロセスとして創発イノベーションを論じ、このモデルが身近な地域での活動モデルとなって具体化され、様々な社会問題領域で次々とイノベーションが創発されることによって、総体として社会変革の渦が広がる潜勢力を持ち得るという期待を込めて、モデル化を試みたものである。